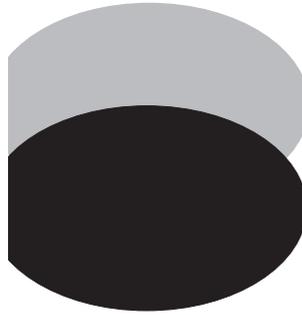


# 20170315

## 絵本学会 NEWS No.57

発行：絵本学会  
発行日：2017年3月15日  
編集：絵本学会広報委員会  
絵本学会事務局：〒164-8676 東京都中野区本町2-9-5  
東京工芸大学 芸術学部 陶山研究室気付  
E-mail office@ehongakkai.com  
http://www.ehongakkai.com



絵本学会

第20回絵本学会大会開催のお知らせ  
第1回日本絵本研究賞報告  
絵本学会理事会議事録  
メールニュース配信開始のお知らせ

### — 第20回絵本学会大会(5月3日・4日 フェリス女学院大学) 開催のお知らせ — 大会テーマ：絵本と絵本学の今、そして未来へ

★期日：2017年5月3日(水)・4日(木)

★会場：フェリス女学院大学 緑園キャンパス  
〒245-8650 横浜市泉区緑園4-5-3  
電話 045-812-8265 (文学部共同研究室)  
相鉄いずみ野線「緑園都市駅」下車・徒歩3分(横浜→緑園都市 約17分)  
JR横須賀線「東戸塚駅」で神奈中バス(緑園都市駅行)に乗り換え「フェリス女学院」下車・徒歩1分(東戸塚→フェリス女学院 約15分)  
<http://www.ferris.ac.jp/access/>

★参加費：会員・準会員(院生など) 1,000円、学生 500円  
一般 2,000円(一日のみ参加の場合 1,500円)

★交流会会費 5,000円 / 2日目昼食(事前申込制) 1,000円

★プログラム：

#### 第1日目 5月3日(水)

12:00～ 受付  
12:30～ 開会式  
12:40～ 挨拶「絵本学会設立20周年を迎えて」  
吉田新一(絵本学会初代会長)  
13:00～ 記念講演 岩村和朗(絵本作家)  
講演会後、日本絵本研究賞発表  
14:15～ 座談会「太田大八先生を語る」  
今井良朗(武蔵野美術大学) / 川端 誠(絵本作家)  
澤田精一(絵本学会理事) / 松本 猛(絵本学会会長)  
吉田新一(初代会長)  
司会：藤本朝巳(フェリス女学院大学)  
15:45～ 研究発表  
17:25～ 第20回絵本学会総会  
フェリス・フラウエンコーア(フェリス女学院大学  
音楽学部 演奏学科声楽専攻)による合唱  
18:30～ 交流会(会場：学内カフェ)

#### 第2日目 5月4日(木)

9:00～ 受付  
9:30～ 研究発表  
11:40～ 休憩  
12:40～ 作品発表  
14:50～ ラウンドテーブル  
A：3学会連携「絵本から幼年童話へ」  
佐々木由美子(東京未来大学/日本児童文学学会)  
竹内美紀(東洋大学/日本イギリス児童文学学会)  
藤本朝巳(フェリス女学院大学/日本イギリス児童文学学会)  
長野麻子(東京成徳大学/絵本学会)  
長野ヒデ子(絵本作家/絵本学会)  
コーディネーター：藤本朝巳  
B：「絵本の創作 その現在と未来」  
澤田精一(絵本学会理事)  
はやしすみ(絵本作家)  
村上康成(絵本作家)  
コーディネーター：和田直人(日本女子大学)  
C：「絵本の研究と教育 その現在と未来」  
石井光恵(日本女子大学)  
中川素子(文教大学名誉教授)  
宮崎詞美(横浜美術大学)  
コーディネーター：生田美秋(絵本学会理事)

16:30～ 閉会式

※大会期間中、太田大八先生の特別展示コーナーを設けます。

★第20回絵本学会大会実行委員会事務局(お問い合わせ先)

フェリス女学院大学 藤本朝巳研究室

メールアドレス：fujimoto@ferris.ac.jp

## 日本絵本研究賞について

絵本学会会長 松本 猛

「日本絵本研究賞」は絵本学会設立20周年を機に「日本絵本賞」を主催している毎日新聞と全国学校図書館協議会の協力を得て、絵本に関する優れた研究論文や評論を顕彰する目的で設置されました。絵本学の構築が叫ばれてから20年以上が経過し、辞典や研究書などの出版も盛んになり、大学などでも絵本を研究対象にするところが増えていきます。こうした流れを確固としたものにするためにも、また、研究や評論の活性化のためにも、本賞を充実、発展させていくことは重要だと考えています。賞を通して、優れた研究や評論が多くの人々の目に触れることは、ひいては絵本の発展に寄与するものだと信じます。

### 第1回日本絵本研究賞選考委員会を終えて

絵本学会は2017年に創立20周年を迎えます。これを記念して、さらなる絵本研究や評論活動の活性化を図るため、絵本学会、公益社団法人全国学校図書館協議会、毎日新聞社が主催となり、新たに「日本絵本研究賞」ならびに「日本絵本研究賞奨励賞」を創設しました。学会理事会においては会長の元、特別委員会を組織し、規則の制定や募集要項の策定を行いました。賞の選考方法については、主催者3者より7名から成る選考委員会が組織されました。

1月20日に開催された選考委員会における選考経過を報告します。まず、松本猛会長から本賞設置の目的、意義について説明がなされました。引き続き、日本絵本研究賞規則第4条2項にしたがって全委員による互選の結果、満場一致で三宅興子委員が選考委員長に選出されました。委員長の司会進行により審議が進められ、さまざまな議論を経た結果、第1回日本絵本研究賞は「村中李衣氏 / 西隆太郎氏」による「長期入院児のための絵本の読みあい」が受賞となりました。なお、「日本絵本研究賞 奨励賞」は「該当無」という結果でした。第2回募集に向けて次なる課題も明らかになり、理事会では「日本絵本研究賞」がさらなる絵本学研究の発展に資するよう、また賞の継続性に向けた幅広い活動が求められていると思います。

(報告：絵本学会特別委員会委員長 本庄美千代)

### ● 第1回日本絵本研究賞選考委員会

日時：2017年1月20日(金) 午後1時より開催

場所：毎日新聞社東京本社5階506会議室

### ● 選考委員 (○は選考委員長)

今井良朗 (武蔵野美術大学名誉教授、元絵本学会会長)

駒形克己 (グラフィックデザイナー、造本作家)

澤田精一 (元福音館書店編集者、絵本学会理事)

### ○ 三宅興子 (英国児童文学研究者、梅花女子大学名誉教授、元絵本学会会長)

本庄美千代 (武蔵野美術大学特別講師、研究担当司書、絵本学会理事、日本絵本研究賞特別委員会委員長)

磯部延之 (公益社団法人全国学校図書館協議会 調査部長)

小島明日奈 (毎日新聞社執行役員東京本社「教育と新聞」推進本部長)

### ● 第1回日本絵本研究賞受賞者・論文表題

受賞者名：村中李衣 / 西隆太郎

受賞論文名：「長期入院児のための絵本の読みあい」

\* 受賞論文は『児童心理』金子書房 2016年6月号(No.1023 / 第70巻9号)、2016年7月号(No.1025 / 第70巻11号)、2016年8月号(No.1026 / 第70巻12号)で発表された。

### ● 第1回日本絵本研究賞 奨励賞 該当無

以上

## 長期入院児のための絵本の読みあい —— 支援プログラムの実際とこれから

村中 李衣 (ノートルダム清心女子大学)

西 隆太郎 (ノートルダム清心女子大学)

### 第1回 入院児と家族の心を支える —— プログラムの概要と意義

筆者らは、入院している子ども達のために、絵本の「読みあい」を通じての支援を実践し、研究している。その実践の形はさまざまであるが、子ども達と絵本を通じてかかわるなかで、子ども達が楽しんでいる姿や、あるいは子ども自身が家族のために絵本を読んであげる姿を映像に収め、離れて過ごすことの多い家族のもとに届けている。子ども達自身が達成感を持ち、家族にも喜んでいただいているが、こうした体験が、子ども達と家族の日々を少しでも豊かにすることを願っている。

「読みあい」とは、著者の一人、児童文学者である村中が用いてきた言葉である。「読み聞かせ」がともすれば一方的な関係を連想させるのに対して、「読みあい」は、絵本を通じての双方向的で人間的なかわりあいを重視する姿勢を示すものである<sup>(1)(2)(3)</sup>。

ここでは、この支援プログラムの着想に至った経緯と、その実際について紹介したい。

#### 1. プログラムの着想に至った経緯

##### 1) 絵本と人との関係

この実践・研究の原点は、1980年代のはじめに遡る。絵本そのものだけでなく、それを読む人との関係を取り上げた研究は、まだほとんどされていなかった頃だった。筆者(村中)は、医学部の病院管理学教室において、小児看護の一方法としての絵本の可能性を研究テーマに掲げ、長期入院児とベッドサイドでの絵本の読みあいを始めた。

当時、絵本といえば、プレイルームに置かれ、病院で持て余す時間をつぶすためのもの、あるいは、院内学級で副教材として活用されるものというのが、一般的な認識であった。中には、移動図書館の病院サービスで子ども達自身が借りることができたり、外部ボランティアの方々が定期的に訪れ、プレイルームで読み聞かせをするという環境に恵まれた病院もあった。けれども、その背後にある発想は、「退屈な病院生活の中、せめて絵本でも読んでもらおう、絵本でも読んであげよう」という消極的なものであることも少なくなかった。

入院児のベッドサイドを訪れ、絵本の読みあいを続ける中で、村中は、絵本にはそれ以上の意義があると思うようになった。子ども達は、「読みあい」の自由なかわりあいの中で、自分が今抱え込んでいる悩みや、言葉にできないでいた思いを、一冊の絵本に託し

て表現してくれる。こうした諸々を受けとめる試みは、当時も、またいまなお、稀なものである。

人と人がいて絵本を読むという行為は、単なる物語の一方的伝達ではない。それは、人と人とのかわりに支えられ、互いの関係性の深まりとともにあるものである。読みあいの経験はこの事実を指し示していたが、それを研究していくためには、既存の枠組みや研究方法を超えていくことが必要であった。また、読みあいによって深められる関係性や感情体験は、マニュアル的・教条主義的なやり方によってではなく、人間同士の自然な交わりや、文学的感受性や想像力を通して生まれるものである。このような実践を行うためには、実践者自身に、子どもと打ち解けあえる開かれた心や、自由で文学的な想像力が求められる。マニュアル化された単純なノウハウに還元できないものであるだけに、この「読みあい」の可能性を他の実践者に伝え、広げていくことも、大きな課題となった。

こうした研究・実践を重ねて、30年以上の時を経たが、絵本と人との関係性についてのまなざしは、どれだけ変化しただろうか。子どもの本についてはいまだに、よい本と好ましくない本の線引きに囚われた議論がなされ、読む者と聴く者との関係性や、そこから生み出される物語の意義は、十分に理解されていないことが多い。実践者がこのような絵本観に留まるなら、型にはまった読み方に陥ったり、子どもとの人間的な関係の深まりよりも表面的な反応の善し悪しの方に流されるようなことが起こってくる。

#### 2) 入院児と家族の心を支えるために

今回、読みあいによる新たな支援プログラムを構築し、研究・実践を進める背景には、以上のような問題意識があった。すなわち、入院児への支援において、絵本を仲立ちとしたイメージ、物語、体験を通じたコミュニケーションと人間関係を深め、これを理解していこうとするのである。

子どもが長期入院を体験するとき、その子にも、家庭にも、さまざまな心の揺れが生じる。患児本人への心理的サポートはもちろん、家庭やきょうだいにに向けた心理的支援も必要になる。一緒に暮らすことができず、日々の面会も制限される入院児と、保護者やきょうだいとのつながりを支えることは、重要な課題である。こうした支援はさまざまに開拓されつつあるところだが、それを対象とした研究はいまだ数少ない。

人の心を支えるとき、直接的な言葉でメッセージを交わすことも重要な手段ではあるが、そればかりでなく、イメージや物語、体験を通じたコミュニケーションも、かわりを豊かなものにするであろう。このような考えから、絵本を通じての支援のあり方を探る点が、本プログラムの特色である。

子どもは、自由に振舞っているようではあっても、常に家族や周囲の中での自分の位置をも気にしている。たとえば病院から一時帰宅した際に、食器棚に家族のものといっしょに並べてあるはずの自分のお茶碗が他の位置にあることをみただけで、心がざわつくといったように。治療のために身体的な制限事項が多く、どうしても「してもらおう」事が増える院内生活において、「家族のために自分が

してあげる」という積極的な心の動きを取り入れることが、家族が支えあう環境作りにとって意義あるものと考えている。

### 3) 映像を用いて —— 離れて暮らすことの多い家族のために

限られた時間にしか出会えない家族に対する、イメージの世界を通じた支援については、イギリスで広がりつつある“Storybook Dads”の試みが示唆的である<sup>(4)</sup>。これは、今回の長期入院児とは異なる対象に向けての家庭支援のプログラムである。

イギリスには、親が刑務所に収監されたことによるトラウマを経験している子ども達が多数多くいるという。このプログラムは、父親が絵本を読む情景を動画に収め、DVDやCDの形で子ども達に贈ることを主な活動としている（現在は、母親も対象となっている）。これらの活動の意義は、受刑者支援としてはもちろん、成人教育の一環としても評価されてきている<sup>(5)</sup>。その後、家族と離れて暮らす兵士達を対象とする“Storybook Soldiers”にも活動が広げられたことは、絵本を通じた家族への支援が、受刑者に限らず意義あるものであることを示している<sup>(6)</sup>。

このプログラムの意義について、創始者である Sharon Berry は、次のように語っている。「作品が贈られることで、子ども達には、親が自分を愛していること、会えなくて残念に思っていること、そして自分が親にとって大事な存在だということが分かります。〔中略〕作品を手にかけていることで、子ども達は力づけられます。いつでも好きなときに —— 親がいなくてつらいとき、寂しいときに、CDを聴くことができます<sup>(7)</sup>。子ども達が誇らしげに学校にこのCDを持って行くと、まわりの子どもも、自分もこんなCDが欲しいと憧れるようである。このような思いは、受刑者が対象であるかにかかわらず、親子の関係にとって共通であることが理解されるであろう。関係の重要性について述べてきたが、直接の関係ばかりでなく、その信頼関係を象徴する「もの」があることは、相手がいないときにも心を支える「移行対象 (transitional object)<sup>(8)</sup>」としての意義を持ちうると思われる。映像、イメージや絵本も、こうした役割を担いうるであろう。

“Storybook Soldiers”と本研究は、対象や状況もまったく異なるものである。しかし、会う機会がなかなか得られない家族の情緒的なつながりを、物語を通して支援していく点は共通している。村中がすでに絵本や物語を通して受刑者への支援を行う実践を行ってきたこともあり<sup>(9)(10)</sup>、“Storybook Soldiers”における支援方法から、本研究への示唆を得ることが可能だと考えられる。

“Storybook Soldiers”では、親の再教育やスキル向上などにも重点が置かれているが、本プログラムの場合は、実践者とのかわりを通じた心理的サポートが重要になってくる。この点では、読みあいの場面で生じる事態や体験について、繊細に理解していく事例研究が有用だと考えられる。このことは、村中がこれまで読みあいの実践の中で研究してきたことでもあり、また共著者の西も、保育学・臨床心理学的な観点から子ども達とかかわる事例研究を行ってきた<sup>(11)(12)</sup>。文学と心理学・保育学の協働によって、子ども達との出会いや、支援のあり方について、新たな学際的理解を深めることを目指している。

## 4) 本プログラムの意義と特色

こうした問題意識から出発した新たな支援プログラムであるが、その意義と特色をまとめると以下のようなことになるだろう。

- ① 対象者が受動的に支援される形だけでなく、絵本の読みあいに参加する能動的な体験を取り入れことで、対象者が持つ力を生かす。
- ② 言葉の次元での伝達だけでなく、それを超え、絵本という媒体を用いて、また実際に思いを込めて読む体験をすることで、イメージや物語、体験を通して、日常的会話を超えた情動的交流を促す。
- ③ “Storybook Dads”の手法を日本に取り入れて異なる領域に応用し、汎用性を高める、新たな試みを行う。
- ④ イメージを通じての支援のあり方について、文学と心理学・保育学の協働による理解を深める。

## 2. 支援プログラムの概要 —— 実施方法

このような支援プログラムを実際にどう行っているか、その概要を具体的に示したい。なお、実施方法のさらに詳細な検討については、西・村中・松下<sup>(13)</sup>を参照されたい。

### 1) 環境の用意

プログラムの実施に用いる絵本については、ベッドサイドという環境を考慮し、言葉がリズムカルで、心が解放されやすいもの、また家族で過ごすシーンが強調されすぎないものを中心に選んだ。乳児から小学校高学年まで幅広い年齢層の発達に対応できるよう、赤ちゃん絵本からクイズ形式の絵本など、さまざまな種類のものになるよう工夫した。子どもの方からリクエストがあれば、地域の図書館の協力を得て、それも活用できるようにした。

絵本を読む補助として、パペットも用意している。パペットは、子どもとのスムーズな読みあいを可能にするためのものである。クロネコ、ウサギ、男の子の人形、女の子の人形の四体を、子どもの年齢や好みに合わせて使い分けている。パペットを持って部屋に入ると、多くの子ども達がすぐに関心を示す。援助者が手にしたパペットと子ども達がかかわりあったり、子ども達自身がパペットを使って話したり絵本を読んだりすることが、自然と楽しめる雰囲気の中で、心が開かれ、想像力の世界が広がるきっかけとなっている。

### 2) 実施準備

本プログラムについては、二つの病院からの承諾を得て実施している。両病院での打ち合わせを行った上、参加を希望する家族を募った。その際、プログラムについて文書で説明し、承諾を得ている。文書では、このプログラムの趣旨と概要を示し、個人情報について記載した。個人情報とビデオ記録は、プログラム実施と研究の目的以外には使用せず、プライバシーを守ること、またプログラム改善のために研究を行い、文章や画像から個人が特定されない形で発表することがあることを示した。また、グループで読みあいを行った際など、他の子どもが映り込む場合があるが、これを他者の目に触れないようにしていただくこと、また他の家庭に届けられるDVDの中に自分の家族が映り込むことがあることについて、了解をいただいた。

絵本もパペットも、病室に持ち込む際は、消毒をし、清潔を心がけている。また、絵本を読む様子を動画で届けるため、タブレット等、動画データ作成・管理のための体制を整えた。

### 3) 読みあいの実施

対象者の協力を得て、子ども達が絵本を楽しみ、絵本を読む様子を動画に収録した。主体的に楽しめるだけの時間を取りつつ、対象児に負荷がかかる長さにならないように配慮している。

動画を編集・DVD化し、家族に届けているが、読みあいを行った子どもや付き添い者にも見てもらい、その際の反応も受け止めるようにしている。プログラム実施後には、簡単な用紙に感想や家族へのメッセージを記入してもらい、入院児と家族間のコミュニケーションの補助としている。相手へのメッセージとして、「〇〇へ」とあらかじめ宛名を記入する部分があるが、内容は自由に書けるようになっており、子ども達なら絵を描いたり色を塗ってもかまわない。保護者には直接に感想を聴くほか、プログラム改善のための資料となるアンケートにも答えてもらっている。アンケートでは、子どもが読みあいを楽しんでいたか、プログラムに参加してよかったか、読みあいに参加した感想、DVDを見た感想、今後改善すべき点について尋ねている。

対象者が心を開き、自ら主体的に楽しんで参加できるようにするには、援助者の柔軟な、いわば臨応的な対応が決定的な重要性を持っている。読みあいはマニュアル化にそぐわないものであることはすでに述べたが、本プログラムの実施においても、一律に固定化した進め方ではなく、子ども達の心の動きやそのときの状況に応じて、さまざまな対応を行っており、したがって実際の読みあいも、多様な形で展開する。こちら側であらかじめ決めた形ではなく、予想外の展開もあるが、そうしたことがあってこそ、その子らしさが生かされ、その日の体験が楽しいものになるのである。

### 4) 事例検討

プログラムで作成した動画や、実施後のインタビュー等を逐語録・エピソードにまとめ、コミュニケーション・シートの使用結果などを取り入れて、事例検討を行った。逐語録を作成する際には、情報を本研究の目的以外に利用しない条件で、協力者（関連領域の学生・院生等）にも依頼した。事例の分析を通して、支援のあり方や実践方法について検討するとともに、文学・心理学・保育学の観点から、家族との関係・支援者との関係について考察を行った。

次号では、この一年間にわたるプログラム実践から見てきたこと、浮かび上がってきた問題を具体的に報告する。

## 第2回 ひとりずつ、ひとつずつの読みあい報告

筆者らは、入院中の子ども達のために、絵本の「読みあい」を通じての支援を実践し、研究している。「読みあい」とは、こちらから一方的に読み「聞かせる」よりも、子ども自身が能動的に読む

ことを楽しめるような、相互的なかわりを意味している。読みあいの際には、子ども達に親しみやすいパペットも連れて行って一緒に読んだり、また子ども達がパペットに読んで聞かせるなど、物語の世界を自由に楽しめるよう心がけた。また、離れて過ごすことの多い家族とのつながりを豊かにする一環として、読みあいの場をDVDに収めて手渡すことも行っている。こうした新しい形での実践は、筆者（村中）自身が行うとともに、病院や読書ボランティアとの連携によっても進めている。

第1回ではこの支援プログラムの着想に至った背景について紹介したが、今回は読みあいの実践例について3つのエピソードを挙げ、これについて検討する。

### エピソード1 絵本の世界を涉猟する（Aくん・2歳）

感染病棟に入院して半年を越えるAくん。読みあいのために訪れた最初のころは、人見知りもあり、絵本に興味を示すものの、いきなり自分自身でかかわるといよりは、「かあちゃん」に呼びかけることで、絵本を読んでもらいたい気持ちを伝えていた。

3回目の訪問では、『まかせとけ』（三浦太郎・作、偕成社、2007）という絵本をきっかけに、絵本とのかかわりが変わり始めた。『まかせとけ』は、工事現場で作業するコンボやトラック達が、「はこんでください」「まかせとけ」と声をかけあい、仕事を引き継いでいく絵本。絵本を読み終わった後、パペットのクロネコがその絵本を持ってAくんに「はこんでください」と声をかけると、Aくんは即座に満面の笑みで「まかせとけ」と応じた。ちょうど、朝のバイタルチェックにやってきた看護師さんが「楽しそうね。でも、ちょっとお熱を測らせてくれるかな？」とたずねると、すかさず「まかせとけ！」。Aくんにとって「まかせとけ」は、自分の力や頼もしさを体現する、誇らしいキーワードになったようだった。

こうして訪問を重ねるうちに、Aくんにとって読みあいの時間は自由に楽しめる時間となっていった。9回目では、翌週がAくんの姉の誕生日だということだったので、「おねえちゃんへのプレゼント」として、読みあいの様子を録画して渡すことを提案した。Aくんは大きくなすいて、『はたらくじどう車スーパーずかん・しょうぼうしゃ』（小賀野実・作、ポプラ社、2008）を選んだ。筆者（村中）が手にしたパペットのクロネコが、「おねえちゃんに、しょうぼうじどうしゃのかわいいいところ、見せてあげましょうか？」と言うと、また大きくなすく。

子どもと図鑑を読みあうのは、本に書いてある文字をそのまま読むことでは成立しない。そこで、パペットが画面見開きに描かれた消防自動車のさまざまなシーン、あるいは駆け抜ける街の絵に向かって「あ？これはなんでしょう？」など、即興的に声をかける。するとAくんは、「えっと、それは…」と自分なりの解説を試みたり、「ここ、信号機！」とパペットに指さして教えてくれたりする。パペットが「このはしご、高いです～、かわいいお」と身震いすれば、大丈夫だよと言うように、Aくんはにっこり笑って、指先ではしごを登ってみせる。こんなふうに、ただ図鑑に書いてある文字を音声化するのではなく、Aくんはパペットや私達を新しい世界に案内す

るように、読みあいを楽しんだ。そうしてできあがった映像は、「おねえちゃん」に見てもらい、その世界を楽しんでもらうのにもふさわしいものになったと思う。

読みあいを録画した際には、「コミュニケーション・シート」に記入してもらうことが多い。DVDを家族に手渡す際のコミュニケーションを補うためのものだが、読みあいの体験がどうだったかを汲み取るためにも用いている。小学生など大きい子の場合には味のある文章を書いてくれることもあるが、Aくんはまだ幼いので、塗り絵でもしてもらおうかと、事前に線画を描きこんだシートを複数用意していた。Aくんは3両編成の汽車の絵が描いてあるシートを選び、色鉛筆セットを覗き込んで、点滴に繋がれていない左手で、緑色の線を手頭車両につっと引いた。「これ、Aくん？」と聞くと「うん」。2両目の車両に赤い縦線。「これは？」と聞くと「かあちゃん」。最後に迷って迷ってオレンジ色の色鉛筆を選び、3両目にゆっくり縦線をつつ。「おねえちゃん」だった。

## エピソード2 呼応する声とリズム (Bちゃん・8歳)

Bちゃんと出会ったのはベッドサイドではなく、子ども達が自由な時間を過ごすことのできるプレイルームだった。読書ボランティアの方が2冊ほど絵本を読んで聞かせてくれていたが、人懐こいBちゃんはお話をまぜっかえしたり、話の展開をおもしろがってころころ転がったり、自由な気持ちで楽しみ始めていたようだった。雰囲気もほどこけてきたところでボランティアの方が自分の読みの後、「次はBちゃんが読んでみる？」と声をかけると、「うん、読む！」と起き上がる。すぐさま絵本棚に飛びついたBちゃんが手にした絵本は、『つきよのかいじゅう』（長新太・作、佼成出版社、1990）だった。

まず、見開き一杯に描かれたオレンジ色のかいじゅうのデザインをのぞきこむ。絵本に顔をくっつけるようにして見つめている様子は、自分と絵本との距離を調節しているようにも思えた。ページをめくり、文字を一つひとつ拾いながら、くっきりとした声で読む様子は、先ほどまで床を転がっておどけてみせていたのとは対照的に、きまじめとも言える一面を感じさせた。

Bちゃんは、登場人物の男が費やした長い時間を受け止めるような慎重で重みのある声を出す。続く湖に響く水音のページを読む時には、静寂を招くようなひそやかな声。Bちゃんが、自分の声の向こうに聞こえるはずの水音を探しているような気がする。一転して、怪獣が現れるシーンでは、明るく笑いを含んだ声で読み進めていく。怪獣が大きくなるシーンでは、声といっしょに背中をのぼす。怪獣とBちゃんが重なり合っていくようだ。

大男のシンクロナイズド・スイミングの場面が変わると、Bちゃんの笑い声は、さっきの怪獣のシーンとは、また異なるおおらかなものとなり、その声といっしょにページを軽快にめくっていく。「ポコポコポコポコ ポコポコボン」。「BO」の音の連なりがお腹に響くのか、左手をお腹にあて、身体を傾け揺すりながら、低い声で歌うように読む。傍でBちゃんの読みを聴いていたパペットも、つられてBちゃんといっしょに歌い始める。自然と息を合わせ、声を響かせ

あいながら、Bちゃんとパペットは柔らかく体を揺らしあっていく。

Bちゃんは、「そうしてしずかなみずうみにもどった」という最終シーン間際の一文を読み終えると、肩でかすかな息を吐き、ゆっくりと、日常（病院のいま）に戻ってきた。みんなの拍手の中、本を閉じると、照れたように身体をくねらせたBちゃんは、もうすっかりものがたりの世界から抜け出して、すっきりとした表情だ。

自分自身で絵本を読むことを楽しんでもらえたので、次は録画することを提案した。お母さんに見てもらえるようにと言うと、「じゃ、呼んでくる！」と明るくプレイルームを飛び出し、すぐにお母さんを連れて帰ってきた。そこでお母さんにも今回の取り組みについて説明し、了解を得て、絵本の読みあいが始まった。選んだのは、『はっきよい畑場所』（かがくいひろし・作、講談社、2008）。パペットに語り聞かせるBちゃんの様子を、お母さんが優しく大切に見守る様子を、動画に収めることができた。文字が多い絵本でもあり、先ほどのように流れるように気持ちを込めて読むわけにはいかなかったようだが、それでも一つのシーンを笑顔で、体ごとの表現を楽しみながら、自分で読み通すことができた。最後に書いてもらったコミュニケーション・シートも、「たのしかった！ またやりたい」というコメントで締めくくられた。パペットに手を通すことで、筆者も魂の共鳴と共感を得ることができた忘れられない体験となった。

## エピソード3 物語の体験に力づけられる (Cくん・4歳)

感染病棟で治療を受けるCくんは、明るく好奇心旺盛な男の子。ただ、好き嫌いがあって病院の食事がなかなか食べられないことがある。そんなときは、食事のこと、また病状のことなどを案じて、お母さんもCくんもともにやや沈みがちになる。

訪問を重ねてきたある日は、食事も随分残してしまった後のようで、Cくんはベッドに横になっており、いつものようにすんなり絵本を読みあうわけにはいかない感じがした。筆者はしばらくはただ傍らにいて、これまで慣れ親しんできたクロネコのパペットとともにお話をすることにした。何気なく話しているうちに、クロネコが「あ、新しい『テレビくん』（小学館）ですね」と、病室に置かれた数少ないCくんの私物に目をとめた。するとCくんはパッと表情を明るくして身を起こし、雑誌を手にとってめくり始めた。

カラフルなページ一面に紹介されるライダーやグッズの説明に始まり、読み進めるほどにCくん自身がライダーの世界の住人になっていく。声に張りが出る。とうとう、検査のためのコードをぶらさげたまま、ベッドからぐわんと立ち上がった。大丈夫かなと心配する筆者に、「Cくんはライダーだから大丈夫！」と力強く宣言し、ポーズをしっかりと決めた。

次の週、この様子を収めたDVDをお母さんとCくんに手渡し、Cくんが本当にかっこいいライダーになってくれたこととお話した。Cくんも誇らしげな様子で、「ここでも見れるよ！」と、病室のプレイヤーをお母さんに差し出し、思いを分かち合った。その後、Cくんはかっこよく読める自信がついたようで、「次、いつぼくの番？」と、楽しみに声をかけてくれるようになった。

## 考察

### 1) 絵本を読みあう関係性

本プログラムでは、絵本を通じた支援のあり方を探究しているが、絵本そのものより、誰とどんな場で絵本を読みあうのが、子ども達と家族の体験に大きな影響を与ええると言えるだろう。したがって、本プログラムでは子ども達が自身の声で絵本を読みそれをビデオに収めることを最終的な「課題の達成」と捉えるのではなく、支援者や付き添いの家族、あるいは離れて暮らす家族と心を通わせながら声を届けたいという気持ちを育て、その結果絵本の世界を楽しむ体験が生まれることを重視した。

一人ひとり入院の状況はさまざまであるから、読みあいの際に家族がいてくれる場合もそうでない場合もあるが、支えあう関係としてとても大きな存在である。Aくんは、かあちゃんの支えを得て読みあいにチャレンジした。楽しんだ体験の後に描かれた絵には、伴走するかあちゃん、おねえちゃんの力を得つつ、自ら機関車となって先導する姿があった。Bちゃんは自分のがんばる姿を観てもらえるとわかると、弾んでお母さんと呼びに行き、お母さんの眼差しに見守られて堂々と絵本を読み切った。自ら気持ちを立て直し、ヒーローとなって立ち上がったCくんは、その勇姿をお母さんに見てもらおうことを楽しみにしていた。読みあいが行われている現場であれ、DVDに収められた録画であれ、大好きな家族に見てもらえることは子ども達にとって誇らしいことであった。家族がその場で優しく見守ってくれた場合もあれば、手渡したDVDではじめて見ってもらう場合もあったが、その場での感想やコミュニケーション・シート、またそれ以外にいただいたお手紙から、楽しんでもらったこと、「入院が決して辛いだけの思い出ではなくなった」というような感想を伺うことができた。DVDを届けることは、単なる家族へのプレゼントに留まらず、治療の厳しさの中で見失いがちな、子どもの豊かな成長の軌跡に目を向け、離れていても共に生きているという家族の関係を実感することにも繋がった。もともと入院児の家族はさまざまな体験や思いを共にしながら支えあっており、この読みあいのDVDは、その関係を改めて一つの目に見える形にする機会となったと、言い換えることもできよう。

支える関係性という点では、ともに読みあう支援者との関係が次に重要になってくる。ただ単に「よい絵本」が与えられればよいとか、絵本による支援だからとしかく絵本を読ませなければと機械的に考えるのではなく、Cくんのように、その子の現在の心に合わせて、絵本を読まない時間もあってよいだろう。読むことそのものよりも、その子と家族にとって、そのひとときが豊かな時間になることの方が重要なことから。

支援者との信頼関係ができていくのには、時間がかかることもある。Bちゃんのように、初めての出会いから親しみある関係や空間を作り出していく子ども達の力にはいつも驚かされる。一方で、幼い子どもの場合など、Aくんのように人見知りする場合もあるし、もちろんCくんのようにそのときの気持ちが上々とは言えないときもある。ここでも、読みあいを機械的に実施しようとするのではな

く、その子の思いに沿って進めていくことが必要だと考えられる。Aくんの場合は、絵本のイメージやリズムを取り入れた「まかせとけ」のやりとりが、自然なやりとりの中で生まれてきたことにより、絵本の世界を日常に結びつけて楽しんでいきかけとなった。

子ども達と関係を築いていく通路は、言葉だけでは限らない。ましてやマニュアルによって拓くことは、できない。それは自然で即興的なやりとりや、声と体が生み出すリズムといった、言葉にしがたい感覚をも通じて展開するのである。まだ幼いAくんやCくんは、言葉でくださしく説明するよりも、パペットの面倒を見ながら自分の世界へと導くように、声や、指先や、全身で体現するポーズを通して、語りかけてくれた。Bちゃんの間には、リズムを身体的に共有する時間が生まれた。

### 2) 子どもの世界に耳を傾けること

絵本を通じた子ども達との相互的なかわりをエピソードで示したが、それはいわゆる「読み聞かせ」とは異なっていた。Aくんは、幼いながらに、知っている事のありったけを集め自分から絵本の世界を読み解いて聞かせてくれた。Bちゃんは、自分を覆っている「らしさ」のベールを脱ぎ五感を総動員させて声を届けてくれた。Cくんはお気に入りのヒーローになりきることでパワーを充電させ、自分を力づける読みを実現させた。

「読み聞かせ」では、大人が一方向的に選んだ「望ましいもの」を子どもに与えることが少なくない。そうになると、読みに子どもを集中させることに重心が傾くが、本プログラムでは、子ども自身が楽しんで参加できる能動性・主体性の方を大切にしたい。楽しむとは、心が能動的に動いていることによって可能になるもの。心が能動的に動くとは、目に見える形だけの問題ではないから、たとえば物語を聞かせてもらいながら、自分なりの意味の体験を創造するといったことも含まれる。その形はさまざまでありうるが、読みあいの体験を通じてその子自身の世界が充実し、どんな環境であれ、その世界を受け止められるような支援者との関係を、これからも探究していきたい。

第3回目は、一年間のプログラム実施過程をふり返り、今後の展開の可能性を探ることとする。

## 第3回 プログラムの意義と課題

筆者らは、入院中の子ども達のために、絵本の「読みあい」を通じての支援を実践・研究している。前回は3つのエピソードを挙げ、その具体的な実践例を報告した。絵本の世界で自分自身を発揮する子ども達の姿に出会えたこと、またその様子を収めたDVDを家族でともに楽しんでもらったことは、筆者らにとっても心沸き立つ充実した体験となった。

今回はこの支援プログラムについて、前回のエピソード以外の経験をも踏まえて、その意義を論じる。また、協働する方々との連携のあり方や、今後の課題についても考察する。

## 1. 「読みあい」の意義

### 1) 子どもにとっての体験

子ども達は、入院により、これまで当たり前のように過ごしてきた家庭と異なる条件下で生活することになる。ベッドの上で過ごす時間は、ゲームをしたりアニメを見たりといったように、楽しみ方が限られてくることも多い。単調になりがちで制約も多い生活の中で、人と出会って絵本を読み合う体験は、新しい変化をもたらしたようだ。

また、ただ受動的に「読み聞かせ」てもらっただけでなく、子ども自身が能動的にかかわり、DVDを通じて「家族に読んであげる」のだと意識することは、良い意味での緊張を伴い、どの子どもやりがいを持って臨んでくれた。前回具体的に述べたように、子ども達自身にとっても、また見守る家族や大人達にとっても、生き生きと楽しめる体験になったと思われる。

### 2) 読みあいの実践

#### ① 絵本の選択

人と出会うだけでなく、絵本との深い出会いを結ぶことが、本プログラムの特色である。持っていく絵本を選ぶ際には、その年齢の子どもに合うもので、ある程度子ども自身に選択の幅が持てるよう心がけた。また、その子が好きなものやリクエストに応じることもあった。一般的に「望ましい」とされる絵本にこだわるのではなく、その日の子どもの気持ちに沿って選ぶことを第一とした。

#### ② 一人ひとりとのかかわり

入院児との読みあいは、集団での「読み聞かせ」とは違って、主には一人ひとりの子どもとのかかわりの中で行われる。

したがって、どんな絵本もその子のペースで読むことができる。『ミッケ!』シリーズ（ジーン・マルソーロ・作、ウォルター・ウィック・絵、糸井重里・訳、小学館、1992）など、ミニチュアの世界に入り込んであれこれと探し続けるような絵本も、探すという目的だけでなく、画面の美しさや凝ったしつらえを急かすことなく心ゆくまで共に味わえた。同様に『しろくまちゃんのほっとけーき』（わかやまけん・作、こぐま社、1972）でも、ある女の子はホットケーキを焼くシーンで、生地の変化や、におい、音などを、自分の五感で楽しみ、「もう一枚、もう一枚」と、何度も繰り返し、ホットケーキを焼き重ねた。

乗り物絵本を選ぶ男の子も複数いたが、物語の起承転結を聞くよりも、自分自身がその乗り物になり切って楽しむことが多かった。物語性のあるものだけでなく、乗り物の図鑑なども好んで読まれた。図鑑といっても、前回示したように、乗り物について一つひとつ解説するのではなく、好きな乗り物のイメージを膨らませたり表現したりしながら、その子が大事にしている世界を案内してくれるような読み方が自然に生まれた。『たんけん絵本 東京駅』（濱 美由紀・作画、小学館、2015）には詳細な解説が書き込まれており、大人が「読み聞かせ」るのは難しい絵本だが、今回の読みあいプログラムでは、子ども達自身が、乗り物の知識を総動員しながら、自在に物語を創って聞かせてくれた。

このプログラムでは、子ども達一人ひとりのペースと楽しみ方で絵本の世界を堪能することが可能であり、その柔軟さが充実した体験につながったと思われる。

#### ③ 子どもの世界を受け止める

入院児との読みあい状況が、保育現場や家庭での読み聞かせと異なるのは、支援者がその子の病室を訪れる点だろう。病室は、その子の部屋であり、その子の生活空間である。したがって本プログラムにおける支援者は、あらかじめ組んだ計画にその子を参加させるよりもむしろ、その子の世界に許しを得て招き入れられる瞬間を待たなければならない。

子どもが絵本を能動的に、その子自身の味わい方で楽しみ、思いを乗せた声を聞かせてくれるとき、それは絵本の内容を文字通り伝える作業ではなく、その子の内なる世界の表現に触れる機会となる。病院を訪れ、その子の部屋で、その子が日々好んで読んでいた絵本を、好きなように生き生きと読んでもらうとき、我々は絵本を通してその子の世界を見せてもらっているのだということを改めて感じさせられる。

一般に「支援」という言葉からは、立場や力の差のようなものが想像されかねないが、そうしたイメージとは逆に、子ども達との読みあいは、むしろその子自身が持つ力や、その子の世界の豊かさに、我々の方が魅せられ、学ばされる体験というべきものであった。また、こちらが敬意をもって子どもの世界を受け止める姿勢があつてこそ、子どもは真に楽しみ、自分の世界を分かち合ってくれるように感じる。

一方で、病室を訪れるということは、その子の生活空間に、家族以外の者が入っていくことでもあるから、十分な配慮が求められる。その子の心への侵襲性は、他の状況よりも幾分高くなるであろう。たとえば外でのイベントとは違って、自分が嫌だと思っても、途中で帰るというようなことは、病室ではできない。「嫌だ」と言っていないから、一見楽しんでいるように見えるから、大丈夫だとは限らない。大人・支援者・専門家と子どもとの関係において、とくに否定的な感情を子どもが自由に表現するということは、そう簡単ではないだろう。子ども達は、随分と「支援者」に気を遣ってくれているものである。このことは、子どもと出会う臨床においては古くから重要視されてきた<sup>(4)</sup>。

本プログラムの実施においては、子どもの世界を真摯に受け止めることが必要であり、言葉や表面的な反応の次元に留まらず、繊細な形で表れる子どもの思いに耳を傾け、理解していくことが求められるであろう。

### 3) 家族にとっての体験

読みあいは、子ども達と筆者らだけでなく、付き添いの母親に見守られる中で実施することも多かった。入院児の家族は、その場で見守ることも、DVDを通して見ることもあったわけだが、それぞれに喜んでもらえたようだった。そのことは、直接のコメントからも、実施後のアンケートからも伺える。「確実に大きくなっていったんですね」「入院生活に、よいこともあった、楽し

かったこともあったと、思える経験になりました」「入院は治療のための時間でもあり、成長のための時間でもあったのだと思います」など、子ども達が能動的に楽しむ姿を通じて、成長を感じてもらえることが多かった。また、幼い子が母親に抱かれながら一緒に絵本を読む姿をDVDに収めたときは、「自分でも子どもの写真を撮ることはあるけれど、一緒にいる姿を撮ってもらえることはなかなかないので嬉しい」と言っていた。家庭にDVDをお送りした際には、祖父母からも喜びのメッセージをいただくことがあった。子ども達が楽しむ姿は、その子にとっても、家族にとっても、嬉しい思い出や、成長の記録の一つとしていただけたようだ。

ある男の子のベッドサイドを訪れたときは、ベッドの上でブロックを広げて遊んでいたところだったが、筆者(村中)としばらく言葉を交わすうちに、ブロックの作り方の本をまるで絵本を読み聞かせるように堂々と開いて読んでくれるようになった。楽しく読み切ったあと、一緒に見守っていたお母さんにも、カメラに向かってメッセージをいただくことにした。お母さんは少しはにかんだ笑顔のあと、「一緒にがんばっていきましょう」と一言語られた。ちょうど窓から差ししてきた光にその笑顔が照らされるところで、その日のDVDの映像は締めくくられた。

ひとときの笑顔や、一言の中にも、その背景にはさまざまな思いがある。わが子を大切に思う気持ち、わが子を支えながら日々歩んでいける力など、あらためて母親の思いを感じさせられる一瞬だったし、後日、お母さんと出会ったときにも、「あのとき、そう言えてよかった」と言っていた。映像となって残るのはほんのわずかな時間だが、そんな一コマが、家族にとっても、また筆者らにとっても、何かしら大切なものを心に残している。

## 2. 連携の意義

### 1) 病院スタッフとの連携

病院からは、本プログラムの意義を認め、適切な時間と場を提供していただき、また必要な医療上の留意点を伺っている。また、守秘義務を踏まえた連携や、筆者らがどのような形で映像をはじめとする個人情報を守るかなど、本プログラムの実施体制についてもご理解をいただいた。病室を訪問する形をとった病院もあれば、入院中の子ども達が集まるスペースが用意されており、そこで実施した病院もあった。

実施場面においては、入院生活の中に、日々自然な形で受け入れていただいた。病院スタッフの方々が、子ども達が楽しく絵本を読む様子を見守った上で、「上手に読めてたね」などと声をかけながら、次の検査へとスムーズに移っていくことも多かった。また、病院スタッフと筆者らの間で、このごろ絵本のフレーズがお気に入りとなっていつも言っていることなど、その子が楽しんでいることを何気なく共有するといったように、互いにコミュニケーションを重ねることができた。こうした自然な流れが、子ども達にとってもその子らしく生活することに、ささやかながら、つながっていったように思われる。

### 2) 読書ボランティアとの連携

本プログラムでは、読書ボランティアの方々にもご協力をいただいた。ある病院でご協力いただいた読書ボランティアの方々は、これまで生涯学習の勉強会の一環として、学校など地域の子ども達が集まる場所で読み聞かせを行うことが多かったが、病院での実践はほとんど全員が初めてだった。今回、本プログラムに参加いただく中で、子ども達との読みあいを実践し、また撮影も担当していただいた。実施した結果については、10名ほどのボランティアが集まる毎月の勉強会の中で分かち合い、検討を重ねてきた。

子ども達と繊細にかかわる読みあいの実践は、単純にマニュアル化することができない。本プログラムを広げていく際には、マニュアルではなく、子ども達と出会う体験を通じて、よりよい実践のあり方について話し合うコミュニティを作っていくことが有効だと思われる。今回の読書ボランティアとの連携は、こうした話し合いによるコミュニティづくりの貴重な一歩となった。一人ひとりの子ども達自身が能動的に読むことを中心とした実践をともにしたことは、読書ボランティアの方々にも新しい気づきをもたらした。この気づきについて、約半年の実践を重ねた後のインタビューから、ボランティアの方々の言葉をもとに紹介する。

#### ① 子どもの生活の流れに参与する・尊重する

「入院生活の中では、先の見通しがはっきりしないこともあり、子どもにも家族にも、さまざまな表情がある。そんな生活に、なるべく自然な形で添いながらかかわっていくことが大事だと思うようになった」「入院時の生活には、お風呂の時間、検査、シーツ交換、体調の変化など、さまざまなことがあり、絵本を読むための時間がずっと取られているわけではない。その中で、一瞬一瞬をその子にとって楽しい時間にしていく姿勢が、私達に求められていると感じた」「絵本だけが子ども達にかかわる時間ではないことが分かってきた。たとえば、子どもがゲームをしているのを遮って絵本に誘うのは、無理がある。トランプやままごとを含めて、その子とかがわって打ち解けることが、やがて読みあいの時間にもつながるのだと分かった」。

入院児と出会うとき、一方的に絵本体験を「与える」ことはできない。子ども達と家族の生活の流れやその重みを、敬意をもって受け止める中で、「読みあい」の時間が生まれることが、あらためて理解される。

#### ② 絵本そのものだけでなく、体験を重視する

「今までは、せっかく自分が選んで練習してきた絵本だから、なんとかその絵本を読んで、子ども達に楽しんでもらいたいというこだわりがあった。今回のプログラムを体験して、その絵本が読めても、読めなくても、物語を通じて一緒に楽しい時間を創っていくことが大事だと思うようになった」。

絵本の内容ももちろんではあるが、誰とどんなふうに読むか、子ども自身にとって意味ある体験になるかどうか、実践においては重要になるだろう。

#### ③ 予想外の事態を肯定的に受け入れる

「これまで訪れていた現場は、ある程度読みに入る態勢が整えら

れている場所だったんだと気づいた。そうでない方が、むしろ自然で当たり前なんだと思うようになった」「計画通りに読みが進まないことを、これまではアクシデントのように捉えていたが、思い通りに進まないことのほうが、実はお互いを受け入れることに繋がるという、積極的な捉え方ができるようになった」。

実践者はしばしば自分の立てた計画に固執してしまいがちだが、子どもの主体性を生かすためには、その日の子どもから出発し、計画を柔軟に変更していくが必要になる<sup>(9)</sup>。ここでは、予想外の事態を受け入れることが、「困ったこと」ではなくて、むしろその子にとってよりよい体験へと生かされていくことが認識されている。

#### ④ 子どもの反応を繊細に見る

「これまでは『読み聞かせる』意識が強く、その成功・不成功を目に見える反応で測ろうとしがちだった。しかし、本プログラムの効果とはそれだけでなく、ベッドサイドで読みあっている時間そのものが、互いにとってかけがえのないものであることを、身をもって学んだ」「ビデオ撮影をしながら感じたことだが、目立った発言や行動でなくても、表情やちょっとした身体の揺らし方などから、その子の思いが伝わってくるように思う。日ごろの学校ボランティアなどでは、つつい分かりやすい『反応』を追ってしまっていた」。

子どもの表現を繊細に受け止めていく必要性については、すでに述べてきた。ここでは、自分自身で実践するだけでなく、ビデオ撮影を担当することも、そのことを意識するきっかけとなったことが分かる。

### 3. 今後の課題

入院生活の中で、子どもと家族は、つらいことや困難なことに直面している。そんな入院生活の中で、本プログラムの読みあいから生まれる楽しみや、絵本やパペットを通じて体験される非日常的空間、また撮影されたビデオは、家族にとって子ども自身にとっても、生活をいつもとは少し違った視野から捉える機会となるだろう。こうした仕掛けが、一過性のおたのしみイベント、あるいはつらさの紛らわせに終わることなく、大人のだれもが子どもの支援者として、近くでも、遠くでも、子どもとかわり、心をとともに動かしながら歩いていく道と地続きにならなければならない。そうした展望のもとに、子どもとかわり、一つひとつ心あるものとなっていくような実践の広げ方が、これからの課題となっていくだろう。

本プログラムを通してのさまざまな気づきについて述べてきた。子ども達一人ひとりの生活の重みを尊重し、その流れに自然な形で参与すること。物語を通じての親しみの中で、子ども達の世界を受け止め、目に見える部分を超えて繊細に見ていくこと。――それは他の場においても、子どもとかわり、重要な視点である。病院との連携をはじめとする実際の問題ももちろんではあるが、子ども達との出会いから出発し、絵本の世界を通して子ども達とかわり、この本質を探究していくことが、これから広く子ども達に対する支援や絵本の意義を考えていく出発点となるであろう。

### 謝辞

子ども達とかわり、場を与えてくださった病院スタッフの方々、実践に加わってくださった読書ボランティアの方々に、また何よりも、絵本の読みあいをともに楽しんでくれた子ども達とご家族に、感謝いたします。

※ 本研究は、第46回(平成27年度)公益財団法人 三菱財団 社会福祉事業・研究助成の支援を受けたものである。

### 引用文献

- (1) 村中李衣『子どもと絵本を読みあう』ぶどう社、2002
- (2) 村中李衣『お年寄りと絵本を読みあう』ぶどう社、2002
- (3) 村中李衣『絵本の読みあいからみえてくるもの』ぶどう社、2005
- (4) Storybook Dads <http://www.storybookdads.org.uk/>
- (5) Parkinson, D. (2007). Let me tell you a story. *Adults Learning*, 19(2), 18-20.
- (6) Stanistreet, P. (2007). Storybook soldiers. *Adults Learning*, 19(4), 24-26.
- (7) McHugh, J. (2006). Inside Story. *Public Finance*, (May 19-May 25, 2006), 31.
- (8) Winnicott, D.W. (1953). Transitional Objects and Transitional Phenomena: A Study of the First Not-Me Possession. *International Journal of Psycho-Analysis*, 34, 89-97.
- (9) 村中李衣『矯正教育現場における『絆プログラム～絵本の読みあいを通して～』の可能性』『矯正教育研究』58巻, 2013, pp. 27-33
- (10) 村中李衣『矯正教育の現場で絵本を読む』松本猛 編『絵本学講座3』朝倉書店、2015, pp. 174-177
- (11) 西 隆太郎「保育者の省察に基づく事例研究の方法論 一子どもたちとかわりを通して一」『乳幼児教育学研究』22巻, 2013, pp. 53-62
- (12) 西 隆太郎「絵本を通して子どもと関わること 一2歳児クラスでの相互的關係とイメージの展開一」『保育の実践と研究』19巻2号, 2014, pp. 68-79
- (13) 西 隆太郎・村中李衣・松下姫歌「長期入院児家族のための絵本の読みあいによる支援プログラム 一実施方法について一」『ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学・児童学・食品栄養学編』40巻1号, 2016, pp. 57-66
- (14) Ferenczi, S. (1949). Confusion of tongues between the adult and the child: The language of tenderness and of passion. *International Journal of Psycho-analysis*, 30, 225-230.
- (15) 津守真「不安定に耐える力を養うこと 一教育計画における柔軟性の必要について」『幼児の教育』63巻10号, 1964, pp. 29-33

## 第1回日本絵本研究賞選考委員会委員講評

選考委員長：三宅興子

絵本学会の二十周年を記念して創設された「日本絵本研究賞」ですが、その第一回の受賞研究に、選考委員全員一致のもと「長期入院児のための絵本の読み合い——支援プログラムの実際とこれから」（村中李衣・西隆太郎）が決まりました。それは、とすれば、理論や歴史、作家や作品の絵本研究が先行してきたなかで、実践報告の形式をとったこの研究が画期的な成果であるという共通認識を得た瞬間でした。

これまで「絵本はコミュニケーション」「絵本の力」など、「絵本とは何か」という奥義に迫るフレーズが伝えられ、さまざまなアプローチで絵本に迫ろうと試行錯誤してきた歴史があります。そこに、家族や日常から切り離された子どもと絵本を「読み合い」、複数のメディアを組み合わせながら「場」をつくり、支援していくプログラムが提示されて、決してマニュアル化できない絵本の可能性と未来の研究を拓いていくエネルギーに触れることができたのです。

次年度の「日本絵本研究賞」へ、多数の研究者が応募されますことを期待しながら…。

選考委員：今井良朗

絵本の〈読みあい〉を通じた支援活動の実践研究報告を三つの具体例を挙げて考察。家族や日常から切り離された長期入院児を対象にした〈読みあい〉は、閉ざされた空間の中で狭くなりがちな自己意識を、絵本に描かれた世界を手がかりに日常を振り返り、子どもの主体性を尊重した想像と創造を促す。同時に実施された映像撮影がDVDになり、家族や周辺の人たちと心を通わせる効果があることも提示している。「世界を分かちあう」、絵本がそのような「場」をつくり出す媒介になり得ること、メディアを組み合わせる意義を実証した実践研究として評価したい。

選考委員：駒形克己

満場一致で村中李衣さん、西隆太郎さんの受賞に決定。おふたりの入院中の子どもたちと向き合いながら実践された「読みあい」の研究報告は、とすると閉塞感をともなう入院生活に、コミュニケーションを促す素晴らしい試みが記載されています。私自身もまた入院をした身。体調が悪く誰とも話をしたくないそんな朝でも、看護師さんたちとのあいさつひとつで、心が救われることがありました。たとえ小さな世界でも、むしろそこから生まれる新たな芽吹きが、やがて万民にも共有されるコトやモノになるのだと思います。

選考委員：澤田精一

子どもたちと一緒に絵本を読んでいく思い通りにいかなかったことがよく起きるのだが、その思い通りにいかないことに内在している創造性に着目したことが大きな手柄である。これは既成の理論を超えてなにかを探ろうとしているわけでもあって、これこそ本来の意味での学問とっていいと思う。しかしその場その場で生成し消滅していく現象をどのように論文として定着させていくか、それはまだすべて解決されているとは思えない。手がかりは見つかった。さらなる探求が期待される。

選考委員：本庄美千代

一年間にわたる長期入院児のための〈絵本の読みあい〉という支援プログラムを実践した研究論文であり、村中氏と西氏両者による従来型の〈読み聞かせ〉ではなく〈読みあい〉という独自の着想は注目に値するだろう。非日常的な極めて狭い空間である小児病棟における絵本の活用を通じた支援という研究課題について、今後の絵本学の発展と研究領域の裾野を広げる可能性が提示された点を評価したい。

選考委員：磯部延之

今回の選考にあたっては、多数の応募を期待していた。というのも絵本については様々な視点から迫ることができ、一つ一つの論文が絵本の世界を広げ深めることに繋がると考えていたからである。残念ながら応募点数は少なかったが個々の切り口は面白かった。何のために論ずるかが明確に伝わってくることを重視した。受賞論文である「長期入院児のための絵本の読みあい」については、絵本の活躍の場を入院児と家族に絞り実践を通して具体的に論じていることを評価したい。特に家族については、思いが及びにくいものである。論者の課題意識に敬意を表す。

選考委員：小島明日奈

絵本を誰かに「読む」ことが読む人自身の心をはぐくみ、聴く人との関係性も豊かに深くする。事例を丁寧に検討し、その仲立ちとなった「絵本」の力とその可能性を浮き彫りにした。こうした取り組みを広げていけるように、パペットなど新しい手法を試みた点も評価できる。読書ボランティアの方々がプログラムを通して多くの新たな気づきを得たように、子どもたちの内なる世界にどうかかわり、どう支えうるのか、本論考は多くの示唆を含んでいる。

## 絵本学会理事会報告

### ● 2016年度 第4回絵本学会理事会 議事録

日時：2016年9月18日(日) 13:00 -

会場：東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2

出席者：松本猛(会長) 陶山恵(事務局長) 生田美秋 佐藤博一  
澤田精一 永田桂子 本庄美千代 松本育子 村上康成  
和田直人 藤本朝巳(第20回大会関連の審議事項のみ)

#### 議事次第

##### ○報告事項

##### 1. 会長挨拶

松本会長より、2016年度第4回理事会の開催挨拶があった。今回の理事会は第20回絵本学会大会および、絵本学会20周年記念事業についての審議事項に絞ったの会議であることが確認された。

##### 2. 前回(第3回絵本学会理事会)議事録の確認

第3回絵本学会理事会議事録の確認があり、承認された。

##### 3. 第19回絵本学会大会(2016年度)について

第19回絵本学会大会(2016年度)の開催報告および決算報告について、川勝大会実行委員長より書面、決算報告を以て報告され、承認された。

##### 4. 各委員会報告

###### 1) 企画委員会

2016年絵本研究会の計画(研究委員会との合同企画)進捗について報告があり、承認された。

###### 2) 紀要編集委員会

紀要「絵本学」18号刊行について、作成の終了および決算報告、発行部数(会員513部、寄贈15部、進呈45部)の報告、抜き刷りについては実費と送料が執筆者負担となったこと、編集委員の1名の増員(第19回絵本学会総会で承認済み)とその任期(他の委員に合わせて2年)についての報告、紀要「絵本学」第19号作成スケジュールについての報告があり、承認された。

###### 3) 機関誌編集委員会

特になし

###### 4) 研究委員会

絵本学会・千葉市美術館合同企画「BIB50周年記念絵本フォーラム」の開催について計画状況が報告され、承認された。

###### 5) 広報委員会

メールニュースの公開準備のため、会員のメールアドレスと氏名の収集と管理について計画を進めていることが報告され、承認された。

###### 6) 特別委員会(日本絵本研究賞)

公募等の進捗状況について報告され、承認された。

###### 7) 「フォーラム 子どもたちの未来のために」について

今後の開催計画(10月ちひろ美術館・あべ弘士展、11月伊藤まこと登壇予定)について報告され、承認された。

##### ○審議事項

##### 1. 機関誌編集委員会より

「絵本 BOOKEND 2017」の計画案について、絵本学会創立20周年記念特別号として刊行することが審議され、誌面のリニューアル、判型の見直し、誌面のデザイン・レイアウトの見直し、見出しの変更について提案があり、審議された。また、「記念特別号」の増ページ計画について提案があり、経費、誌面構成、特集案等について提案され、継続審議となった。

##### 2. 第20回絵本学会大会(2017年度)について

第20回絵本学会大会実行委員長より、以下のように計画の提案があり、審議を行った。

大会開催日時：

2017年5月5日(金)・6日(土) もしくは5月3日(水)・4日(木)、開催校の都合により、決定は10月以降となる。

開催場所：フェリス女学院大学緑園キャンパス

大会テーマ：

「絵本学会20周年記念大会 絵本と絵本学の今、そして未来へ」  
20周年記念講演(基調講演会)：吉田新一氏

シンポジウム：松本会長がシンポジウムの一員となって企画、登壇者作家：編集者(荒井良二・筒井大介など)。

ラウンドテーブルA：絵本の創作(絵本表現、物語の可能性)と絵本の批評・研究

ラウンドテーブルB：実行委員会による企画

ラウンドテーブルC：三学会連携企画(絵本学会、日本イギリス児童文学会 日本児童文学学会)

学会員による研究発表は従来の通り。開催計画については継続審議となった。

##### 3. 絵本学会20周年記念事業について

記念事業企画担当理事として、澤田・和田・松本育子・生田理事が素案を検討し、提案を行った結果、審議ののちに出版事業を進めることに決定した。

##### 4. 日本学術会議協力学術研究団体登録について

###### (会員名簿情報収集について)

申請に必要な会員情報の収集を2016年度版会員名簿作成のためのアンケートに合わせて行うこと、次回理事会で、登録申請フォーマットを確認することが検討され、作業をすすめることとなった。

##### 5. 事務局より

入会者退会者について審議を行った。

入会者：山路千華、森本俊司、三好伸子、木村美幸、佐々木雅子、飯田妙子、松元早苗、高木まみ、南香織、川本みつこ、周堂波、清水寛子

計12名

退会者：大月ヒロ子、灰島かり(ご逝去)、大利かおり、向井弘子、内藤綾子、わたなべゆうこ、太田大八(ご逝去)、三浦彩子、山本希恵、林絵美、副島鈴奈、大橋美佐子、福永朋子、

島式子、石川有光子、大畑順子、佐藤愛子  
計17名

## 6. その他

### 1) 事業後援について

以下の後援事業について審議され、承認された。

ちひろ美術館(東京)「赤羽末吉・中国とモンゴルの大地展」

ちひろ美術館(東京)「村上春樹とイラストレーター —佐々木マキ、大橋歩、和田誠、安西水丸—展」

### 2) 会員向けチラシ配布願いの件

原則として学会ニュースの郵送に併せて同封すること、①絵本学会主催・共催事業、②賛助団体の事業、③絵本学会後援事業、④会員個人の出版物の案内、以上については配布を行うことが確認された。

3) 米・オハイオ州マツザミュージアムからの問い合わせの件  
事務局宛に当該美術館より協力の問い合わせがあり、本件について理事会の中で周知した。

## ◎ 2016年度 第5回絵本学会理事会 議事録

日 時：2016年11月26日(日) 13:00 -

会 場：東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2

出席者：松本猛(会長) 陶山恵(事務局長) 生田美秋 澤田精一  
永田桂子 本庄美千代 松本育子 村上康成 和田直人  
委 任：佐藤博一

### 議事次第

#### ○報告事項

##### 1. 会長挨拶

松本猛会長より、第5回理事会の開催挨拶があった。

##### 2. 前回(第4回絵本学会理事会)議事録の確認

第4回絵本学会理事会議事録の確認があり、承認された。

##### 3. 各委員会報告

###### 1) 企画委員会

2016絵本フォーラム(2017年2月4日開催)について、広報用のちらしの準備および当日スケジュールの確認が報告された。

###### 2) 紀要編集委員会

紀要「絵本学」19号報告の刊行について進捗状況が報告された。第19号には9編の原稿投稿があった。

###### 3) 機関誌編集委員会

機関誌『絵本 BOOK END 2017』は絵本学会20周年記念特別号として、刊行を計画していることが報告された。

絵本学会20周年記念としては、デザイン・レイアウト・判型の変更を進めている。刊行は2017年5月中旬の予定であることが報告された。絵本学会20周年記念出版事業と平行するため、内容については審議事項として扱うこととした。

###### 4) 研究委員会

11月6日開催の研究会について報告された。参加者40名弱(会員

10名程度)であり、会員向けの告知(チラシ配布)のあり方について改善が必要であるとの反省が報告された。

企画委員会とのコラボ企画「絵本フォーラム」について企画委員会と併せて報告があった。

###### 5) 広報委員会

特になし

###### 6) 特別委員会(日本絵本研究賞)

日本絵本研究賞の応募状況について、件数および各論文タイトルについて報告があり、最終選考に向けての進捗状況が報告された。今回の応募は3件であったことが報告された。

## 4. 事務局より

日本学会協議協力学術研究団体登録について(会員名簿情報収集について)11月末日締切の会員情報収集について進捗状況が報告された。

## 5. 「フォーラム子どもたちの未来のために」について

10月開催のイベントと、12月開催の計画について報告された。

10月22日 ちひろ美術館にて開催(登壇:はたこうしろう、那須正幹)

12月8日 出版クラブにて開催(伊藤真氏講演の勉強会)

## ○審議事項

### 1. 各委員会より

#### 1) 企画委員会

特になし

#### 2) 紀要編集委員会

特になし

#### 3) 機関誌編集委員会

機関誌『絵本 BOOK END 2017』について「記念特集」を設けることを検討することが審議された。記念号出版のための予算を2017年度に限り増額することを会長決裁により決定した。

#### 4) 研究委員会

特になし

#### 5) 広報委員会

「学会ニュース」掲載記事についての検討が行われ、発行計画の是正が諮られた。

#### 6) 特別委員会(日本絵本研究賞)

最終選考に向けての第一次選考の選考方法について審議され、今回は応募3件であったことから、すべての原稿を最終選考に上げることが決定した。

## 2. 第20回絵本学会大会(2017年度)について

第20回絵本学会大会の開催計画について担当理事より提案があり、審議の結果以下のように決定した。

開催日:2017年5月3日(水)・4日(木)

会場:フェリス女学院大学緑園キャンパス(横浜市泉区)

大会テーマ:「絵本と絵本学の今、そして未来へ」

### 3. 絵本学会20周年記念事業について

出版記念事業について、担当理事より計画が提案され、審議を行った。本件については継続審議となった。

### 4. その他

#### 1) 事業後援について

以下の後援事業について審議され、承認された。

軽井沢絵本の森美術館「ふしぎの国のアリス展～画家たちが織りなす多彩な世界～」

#### 2) 入退会者について

審議ののち承認された。

入会者：松田智子、久富陽子

計2名

退会者：八木佳代子、梶浦真由美、諸井泰子

計3名

#### 3) 会員向けチラシ配布願いの件について

会員から、学会からの郵送物との同送の形で出版物・展覧会等のチラシの配布が希望された場合、どのように対応していくかについて、前回理事会審議の結果を更に検討し、継続審議となった。

#### 4) 3月開催の理事会日程について

3月4日に変更に変更と決定した。

## ● 2016年度 第6回絵本学会理事会 議事録

日時：2017年1月8日(日) 13:00 -

会場：東京工芸大学中野キャンパス2号館3階アトリエ2

出席者：松本猛(会長) 陶山恵(事務局長) 澤田精一 永田桂子

本庄美千代 松本育子 村上康成 和田直人

藤本朝巳(第20回大会関連議題のみ)

委任：生田美秋 佐藤博一

### 議事次第

#### ○報告事項

##### 1. 会長挨拶

松本猛会長より、第6回理事会の開催挨拶があった。

##### 2. 前回(第5回絵本学会理事会)議事録の確認

第5回絵本学会理事会議事録の確認があり、承認された。

##### 3. 各委員会報告

###### 1) 企画委員会

「絵本フォーラム2016」について研究委員会との合同企画として開催することが報告され、承認された。

###### 2) 紀要編集委員会

絵本学会紀要「絵本学」第19号刊行について経過が報告された。

###### 3) 機関誌編集委員会

特になし

#### 4) 研究委員会

2016年研究助成について

3月末に報告書を受理する予定であることが報告された。

2017年研究助成の募集については、次回3月理事会で諮り、2017年6月締切、7月に対象者決定の予定であることが報告された。

#### 5) 広報委員会

メールニュース配信準備について経過の報告があった。各種イベント告知について、ウェブやメールニュースでの広報を中心に検討されているが、同時に現行のとおりチラシの配布も必要であるとの意見も出て、引き続き対応を整えていくこととなった。

#### 6) 特別委員会(日本絵本研究賞)

選考進捗状況について、1月20日に第一回審査を行うこと、その際に松本会長も同席することが報告された。審査員の謝礼について、外部審査員には一律3万円、主催団体からの審査員には一律1万円の謝礼を支払うことが検討され、承認された。また、次回3月理事会にて第2回の募集計画について諮ることも報告された。

### 4. 事務局より

#### 1) 絵本学会寄贈本について

2) 日本学術会議協力学術研究団体登録について(会員名簿情報収集について)、作業経過が報告された。

### 5. 「フォーラム 子どもたちの未来のために」について

次回の開催予定(2月3日17:30～ 講師、野上暁 会場、童心社)について報告があった。

### 6. 事務局より

以下の寄贈本について報告された。

谷暎子「占領下の児童出版物とGHQの検閲 —ゴードン・W・ブラング文庫に探る—」共同文化社刊

#### ○審議事項

##### 1. 各委員会より

###### 1) 企画委員会

特になし

###### 2) 紀要編集委員会

特になし

###### 3) 機関誌編集委員会

特になし

###### 4) 研究委員会

特になし

###### 5) 広報委員会

特になし

###### 6) 特別委員会(日本絵本研究賞)

選考委員(7名)の謝礼について

### 2. 第20回絵本学会大会(2017年度)について

大会開催計画について、藤本大会実行委員長より計画案が提出さ

れ、審議が行われた。太田大八先生の追悼企画案について、座談会の記録が資料的価値を持つような内容になることが望ましいとされ、登壇候補者について審議された。本件は、継続審議として検討が進められることとなった。

### 3. 絵本学会20周年記念事業について

20周年記念事業として出版企画を進めることで継続審議をしていることが、担当理事より報告され、内容について審議が行われた。本件は継続審議となった。第20回大会開催に合わせ、絵本学会20周年の記録誌を作成し配布することとなった。また、絵本学会入会案内を刷新し、大会開催時より配布できるように作成を進

めることが決定された。

### 4. その他

#### 1) 事業後援について

以下の後援事業について審議され、承認された。

ちひろ美術館（東京）「日本デンマーク国交樹立150周年イブ・スバング・オルセン展」

#### 2) 入退会者について

審議ののち承認された。

入会者： ユンヘジョン、養田もえ、焦一然 計3名

退会者： 成田順子 計1名

#### 絵本学会メールニュース配信のご案内

2017年度より学会名簿に記載されたメールアドレス宛に「絵本学会メールニュース」をお送りします。送信元アドレスは、「info@ehongakkai.com」になります。

なお、名簿作成の際に複数のアドレスをお知らせいただいた場合には、第1番目に記載された宛先に送信しますので、必要に応じて各自で転送設定等をお願いします。

「絵本学会メールニュース」は4月初旬にテスト配信を行い、以後、事務局、各委員会からのお知らせを主な内容として、定期的に配信する予定です。



絵本学会